

ダヤン・ハガンの年代（下）

岡田英弘

（三）満都魯に至る北元可汗の紀年

ダヤン・ハガン以前の可汗で最も在位年代の確かなのは、既に「従来の研究」の章中で言及した通り満都魯である。即ち明憲宗実録卷一四六、成化十一年十月己卯の条に

勅英国公張懋等、曰、近聞、北虜滿都魯僭立名號、吞併別部、驅散朵顏三衛。設或被其逼從、為之嚮導、遺患非小。爾等其悉心訓練官軍、仍會議軍中因革事宜、奏聞區處……。

とあつてその可汗と号したことが知られ、同書卷一九二、成化十五年七月庚辰の条には

朵顏・福餘・泰寧三衛虜酋各奏報、迺北滿都魯・乜加思蘭已死。且請從便途入貢。并求開市……。

とあつてその死が伝へられてゐる。それではこの可汗の年代は、三系統の蒙文史料には如何に記されてゐるであらうか。これを論ずるには先づ明初以来の歴代の可汗の年代からして説き起さねばならない。

トメト系紀年の代表として先づロブサンダンジンのアルトン・トブチを取り上げよう。言ふまでもなく順帝が北奔し大都が明軍の手に陥ちたのは元の至正二十八年戊申、明の洪武元年のことであつて、順帝が応昌に殂したのは

洪武三年庚戌のことである。これ等の年次については蒙文史書にも全く異説がないからこれを出発点として採用し、次の昭宗愛猷識礼達臘から始めて次々に現れる十二支紀年に明の年号を当てはめて見る。⁽³³⁾

(1) *Tojoran temür qayan* (順帝) の子 *Biüg-tü qayan* (昭宗) は、同年戌年 (洪武三年庚戌) に応昌といふ名の城で大位に即いた。九年経つて、午年 (洪武十一年戊午) に崩じた。

(2) *Usqal qayan* (脱古思帖木兒) は同年午年に大位に即いた。十一年経つて、辰年 (洪武二十一年戊辰) に崩じた。

(3) その後同年に *Jorix-tu qayan* が大位に即いた。四年経つて、未年 (洪武二十四年辛未) に崩じた。

(4) *Engke qayan* は四年 (洪武二十四—二十七年) 大位に在った。

(5) その後同年戌年 (洪武二十七年甲戌) に *Elbeg qayan* が大位に即いた。……帝位に即いて六年経つた後、⁽³⁴⁾卯年 (建文元年己卯) に *Elbeg qayan* と *Oyirad* の *Batula* 丞相・*Ögeci qasıqa* の二人が害して崩じた。

(6) その後 *Tojoran qayan* (坤帖木兒) が同年大位に即いた。四年経つて、午年 (建文四年壬午) に崩じた。

(7) その後 *Oloi temür qayan* (本雅失里) が大位に即いた。三年経つて、寅年 (永楽八年庚寅) に崩じた。

(8) その後、翌年卯年 (永楽九年辛卯) に *Dalbag qayan* (答里巴) が大位に即いた。五年経つて、未年 (永楽十三年乙未) に崩じた。

(9) その後、同未年に *Oyiradai qayan* が大位に即いた。第十一年巳年 (洪熙元年乙巳) に崩じた。

(10) その後同年巳年に Atai qayan (阿台) が大位に即いた。……Atai qayan は大位に即いて十四年経つた後、午年(正統三年戊午)に Oyirad の Toron 太師の手に崩じた。

(11) その後同年に Tayisung qayan (脱脱不花) が大位に即いた。……申年(景泰三年壬申)に Tayisung qayan は Torlad の Čabdan の手に崩じた。帝位に即いて十五年経つたのである。

(12) その後 Maraköirgi qayan (麻兒可児・馬兒可児吉思) が大位に即いた。八年在位して酉年(成化元年乙酉)に崩じた。

(13) その後……Maruligai 王は Muulan qayan を……酉年(成化元年乙酉)に大位に即かせた。……戌年(成化二年丙戌)に Maruligai 王の手に崩じた。

(14) その後 Mandurul-i qayan (滿都魯) が Qasarantai の山梁に末年(成化十一年乙未)に大位に即いた。

……Mandurul-i qayan は帝位に五年在つて亥年(成化十五年己亥)に崩じた。

ここに至つて始めてアルタン・トブチの伝へる滿都魯の年代が、先に引いた明実録と完全に一致することが明らかになるが、その他の可汗の年代も、和田先生の研究された結果と能く合ひ、やや疑はしいのは Oyiradai qayan の歿年洪熙元年が、明太宗実録卷二六七、永樂二十二年正月甲申の条に見えた忠勇王金忠の語に依れば二・三年過ぎるらしい事位である。⁽³⁵⁾更に細かく見れば、脱古思帖木児と坤帖木児の間に三可汗が相継いだとするのは、実録卷五一、永樂四年三月辛丑の条の昭宗から鬼力赤までを七主、卷七七、六年三月辛酉の条の昭宗から坤帖木児までを六輩とする数へ方と一致してその信すべきを思はせる。⁽³⁶⁾更に坤帖木児の歿した建文四年と本雅失里の立つた永樂六

年の間に空位期間を置くのは、この間に在位した鬼力赤可汗⁽³⁷⁾を異姓の出として削つたからであらう。也先可汗が見えないのも恐らく同じ理由からで、脱脱不花の歿年景泰三年から麻児可児の立つた天順二年まで約六年の空位がある。これを敘述の形式の面から見ればアルタン・トブチの紀年の特徴は、(a)僅かの例外を除いて「その後同年某年に某可汗が高位に即いた。幾年経つて、某年に崩じた (tegün-ü qoyına mōn on—jī-dür—qayan yēke oro sarūba. —on bolju—jī-e tngri bolba.)」の方式を繰り返すこと、(b)昭宗の場合を除き続柄を記さぬこと、(c)答里巴及び空位の場合を除き前可汗の殂落の年に嗣可汗の即位を置くこと、(d)年を記すのに十二支のみを用いること、等であつて、思ふにこれはトメトに伝へられた王名表をそのまま写したものであり、その形式・内容を忠実に伝へてゐるのであらう。

それではオルドス系の蒙古源流ではどうか。一例として昭宗を挙げれば、源流には次の如く記されてゐる。

その子 Bilig-tü qayan は戊寅生れで、三十四歳の辛亥の年に即位し、八年経つて、四十一歳の戊午の年に崩じた (tegünü köbegün bilig-tü qayan uu bars jiltei: ručün dörben-iyen sin yaqai jī-e qan sarūju: naiman jīl boluyad: döcün nigen-iyen uu morin jī-e qalibai:)。

即ちその特徴は、必ず(a)続柄、(b)生年の干支、(c)即位の時の年齢、(d)その干支、(e)在位年数、(f)享年、(g)卒年の干支の七つの要素を含むことであるが、就中その即位を概ね前可汗の殂落の翌年に持つて来てゐる点はアルタン・トブチと著しく異り、その結果在位年数は一年づつ少くなつてゐる。これはオルドスに伝へられた王名表がさうなつ

てゐたのであらう。今源流の本文を一一訳出する煩を避けて、その所載の諸可汗の生年・即位・卒年の干支、及び在位年数を一覽表にして掲げる。⁽³⁸⁾

可 汗 名	生 年	即 位	卒 年	在位年数
(1) Bilig-tu qayan	戊寅	辛亥	戊午	八年
(2) Usgal qayan	壬午	己未	戊辰	十年
(3) Engke jorij-tu qayan	己亥	己巳	壬申	四年
(4) Elbeg qayan	辛丑	癸酉	己卯	七年
(5) Gün temür qayan	丁巳	庚辰	壬午	三年
(6) Öljei temür qayan	己未	癸未	庚寅	八年
(7) Dalbag qayan	乙亥	辛卯	乙未	五年
(8) Esekü qayan	丁卯	乙未	乙巳	十一年
(9) Atai qayan	(a) 丙辰	庚寅		
	(b) 庚午	丙午	戊午	十三年
(10) Tayisung qayan	壬寅	己未	壬申	十四年
(11) Esen qayan	丁亥	戊午		
(12) Markörgis qayan	丙寅	壬申	癸酉	

(13) <i>Mulan qaran</i>	丁巳	癸酉	甲戌	二年
(14) <i>Mandurulun qaran</i>	丙午	癸未	丁亥	五年

前述の形式を踏まないものはこの表から省いたので、例へば也先可汗の卒年は本文の前後関係から見て壬申（景泰三年）とすることは明らかだが採らない。また脱脫不花可汗の死後 *Arbarji* 親王が一時可汗の位に登つたことは源流の本文には記されてゐるが、これもまた前述の形式に従はないので除いた。本表を前に訳出したアルタン・トブチと比較すると幾つかの差異がある。先づ(a)アルタン・トブチの *Jorir-tu*・Engke 二可汗を一人にして *Engke jorir-tu* と呼び、かく一代を減じてゐること、(b) *Öljei temür* 即ち本雅失里可汗の治世を前へ延長して鬼力赤の在位期間を含ませてゐること、(c) *Eskü*・Esen 二人の異姓の可汗をそれぞれ一代に数へてゐること、(d) 阿台が永樂八年本雅失里可汗の敗亡の後を承けて立つたとする伝へがあつたと覺しくその即位を庚寅・丙午二通りに重複して記してゐること、(e) 麻兒可児の死は乙酉（成化元年）とすべきを十二年早い癸酉（景泰四年）に当て、その結果次の二可汗の年代がアルタン・トブチより十二年づつ繰り上つて、滿都魯の治世が成化十一—十五年でなく天順七年—成化三年と誤つてゐることである。かく蒙古源流はアルタン・トブチより正確さに於いて劣るが、卒年のみを取り上げてその十二支を検すれば、源流はアルタン・トブチと能く一致する。これが、初め十二支だけで記してあつたのを、後に十干を加へた時の年次の繰り誤りに由るものであることは、烟眼なる和田先生のつとに指摘せられた所である。⁽³⁹⁾とすればオルドス所伝の王名表も、本来の形はアルタン・トブチの如きものであつたに相違ない。ただ異なる所は生年干支とそれから算出された即位の時の年齢及び享年であるが、これについては後で論ずる。

これ等に対して異彩を放つのがチャハル系のガンガイシ・ウルスハルの紀年である。幸ひその文は極めて簡にして要を得てゐるので、明白な脱誤をアルタン・クルドン、ボロル・エリケに照らして訂正しつつ、次に全文を訳出しよう。⁽⁴⁰⁾ 括弧内は原文で小字の註記となつてゐる部分である。

(1) 後に戊年、昭宗皇帝 *Biigtü qayan* 愛猷識礼達臘が大位に即いた。九年経つて戊午の年（洪武十一年）に崩じた後、

(2) 翌年その子（……）*Usqal qayan* が大位に即いて、十年経つて戊辰の年（洪武二十一年）に崩じた。

(3) 翌年その子 *Joritu qayan* が大位に即いて、三年経つて辛未の年（洪武二十四年）に崩じた。

(4) 翌壬申の年その子 *Engke elbeg nigilesügei qayan* が大位に即いて、六年経つて丁丑の年（洪武三十年）*Tayicud Oyirad* の *Batulan cingsang*（丞相）・*Ögei qasig-a* 一臣が手を下して崩じた。

(5) 同年その子 *Köke temür*（一書に *Gün temür*）と *Torotan qayan* と云ふ）*qayan* が大位に即いて、三年経つて己卯の年（建文元年）に崩じた。

(6) 同年 *Öjsei temür*（*Gün temür* の弟）*qayan*（また *Öjeyiti qayan* と云ふ）が大位に即いて、九年経つて丁亥の年（永楽五年）に崩じた。

(7) 同年その子 *Dalba qayan* が大位に即いて、五年経つて辛卯の年（永楽九年）に崩じた。

(8) 同年その子 *Oyiradai qayan* が大位に即いて、十一年経つて辛丑の年（永楽十九年）に崩じた。

(9) 同年その子 *Atai qayan* が十四年在位した。彼は *Oyirad* を伐ち、*Batulan* 等を法に置いて讐を復した。

甲寅の年（宣徳九年）Batulan の子 Toron 太師が手を下して崩じた。

(10) 同年その子 Tayjung qayan が大位に即いた。十五年経つて戊辰の年（正統十三年）Ii・Dii 二子と共に Torlod の Čabdan が手を下して崩じた。Mendü örlüg 等は Čabdan を伐つて法に置いた。

(11) その後黄金族のハガンの一門なる Mayaköri qayan が大位に即いて、翌年巳年に崩じた（子はない）。

(12) 同年 Tayjung qayan の子 Mulan qayan を Abay-a の Muuigai ong（漢語の王）が奉じて帝位に即けたが、ハガンは讒を信じて第十一年己卯（天順三年）Muuigai を襲つて、力及ばず彼等の手に崩じた（子はない）。

(13) 同年 Tai jung qayan の異母弟 Manduruli qayan が大位に即いて、四年経つて癸未の年（天順七年）に崩じた（子はない）。

即ち満都魯の年代は、即位・卒年とも實際より十六年も早くなつてゐる。このずれが何処から来たか知るために前のアルタン・トブチ、蒙古源流の紀年と比較して見ると、先づ(a)アルタン・トブチの Engke・Elbeg 両可汗を混同して一人とした為に前者の治世三年を脱し、(b)次に答里巴の在位をアルタン・トブチと同じく五年としながら即位を本雅失里可汗の卒年に置いた為に又一年を減じ、(c)Mulan qayan の死はアルタン・トブチに依れば脱脱不花可汗の死の十四年後であるのを十一年後とした故に三年短くなり、(d)満都魯即位前の九年の空位時代を落してゐるからで、合計十六年の不足となるわけである。して見ればこの誤差は、元來在位年数のみ記してあつた王名表を用ひて絶対年代を決定しようと試みた結果と見るべきもので、個々の可汗の在位年数は殆んど皆アルタン・トブチ

と一致してゐる。ただ著しく異なるのは *Mulan qayan* の在位を二年とすべきものを十一年の長きに涉つたとし、その代り麻兒可兒の治世を僅か二年に短縮してゐることであるが、これも前後の可汗の年数の入れ違ひと見ることが出来る。即ち王名表の原型では麻兒可兒が十一年、次の可汗が二年とあつたもので、実年代では景泰六年に麻兒可兒が立ち、成化元年に卒して *Mulan* が立つたのであらう。この景泰六年といふ年次は、アルタン・トブチの天順二年よりもよく明実録に一致する⁽⁴¹⁾。即ちチャハルの王名表では、也先可汗の治世なる景泰四―五年が空位にしてあつたものと思はれる。

以上トメト、オールドス、チャハル三系統の紀年を分析して、それ等が各々独自の王名表に基いて構成されたことを明らかにしたが、その結論を要約すれば、(1)アルタン・トブチに採用されたトメト所伝の王名表は異姓の可汗を含まないがそれ以外の各代につき即位の年の十二支、在位年数、卒年の十二支を記したもので最も正確であり、(2)蒙古源流の基礎となつたオールドス所伝の王名表は、元来トメトのものに似たものに生年干支を加へ、それに合はせて即位・卒去の年次にも十干を配当したもので麻兒可兒可汗の卒年及びそれ以後の干支は十二年早くなつてをり、(3)チャハルの王名表は本来各可汗の在位年数のみを記したものであつたといふことになる。上述の知見を念頭に置いて、次に滿都魯の死後に相繼いだ四代の可汗の年代について論じよう。

(四) ト赤に至る四代の紀年

蒙古の年代記の伝へる年代が始めて一致するのはダヤン・ハガンの孫ボディ・アラク・ハガン (*Bodi alar qayan*)

即ち明人の所謂ト赤の卒年である。アルタン・トブチには

ボディ・アラク・ハガンは二十四年帝位に在つて、未の年の七月の十五日にジョドロシ・ウンドル (Jodolung öndör) に崩じた。⁽⁴²⁾

とあつて月日まで示されているが、何れの末年かこれだけでは明かでない。所が蒙古源流には

四年帝位に在つて、四十四歳の丁未の年に崩じた。⁽⁴³⁾

とあつてこれを丁未、即ち嘉靖二十六年に当ててゐる。ガンガイシ・ウルスハルを見ると、

ボディ・アラク・ハガンは四十三年在位して、五十歳の時丁未の年 (嘉靖二十八年) に崩じた。⁽⁴⁴⁾

と、明の年号は二年誤つてゐるがやはり丁未である。和田先生の研究に拠れば、明世宗実録卷三七〇、嘉靖三十年二月甲戌の条に北虜小王子打来孫、即ちボディ・アラク・ハガンの嗣子ダライスン・ゴデン・ハガン (Daraysun gödeng qaran) が遼西の三岔河に侵駐したのを数年前の事と伝へてをり、⁽⁴⁵⁾ 嘉靖二十六年にその父可汗が歿したことは略々確かである。して見ると成化十五年に満都魯が卒してから嘉靖二十六年のト赤の死までの六十八年間の何処かにダヤン・ハガンの治世があつたわけである。

蒙古史料に従へば、この期間には四代の可汗が相繼いだことになつてゐる。即ちアルタン・トブチに記す所に依れば、(1) マンドグリ・ハガンの死後はボルフ親王 (Bolqu jinong) が立つて可汗となり、(2) ボルフの死後その子ダヤン・ハガンが即位し、(3) ダヤン・ハガンの死後その第三子バルス・ボラト親王 (Barsu bolad jinong) が一時篡立したが、(4) 間もなく左翼三万戸の奉ずるダヤン・ハガンの長孫ボディ・アラクに迫られて退位したといふこと

ある。これはガンガイ・ウルスハルでも全く同じで、(1) Bolgu jinong、(2) Sayin dayun qaran、(3) Barsu bolod (4) Bodi alar qaran の四代を挙げてゐる。ただ異なるのは蒙古源流の所記で、先づボルフ親王の即位の事実を明言してゐない。即ち

さて、バヤン・モンケ・ボルフ親王は、その二十九歳の戊子の年から三年経つて、三十一歳の庚寅の年にユンシ
フブ (Yüngsiyebü) のケリヒ (Keriy-e)、チャガン (Čaran)、テムル (Temür)、ミンケ (Möngke)、ハラ・
バダイ (Qara badai) の五人に害されて崩じた。⁽⁴⁶⁾

とのみあるが、戊子とは源流のマンドグルン・ハガンの歿年とする丁亥の翌年であり、この書法は前章に説いたオルドス系王名表の諸可汗に用ひられたものと全く同じである。恐らく王名表の原形ではボルフ親王が戊子の年に可汗の位に即いたと記されてあつたものであらう。併し源流の特異点はこのみに止らない。ダヤン・ハガンの死後直ちに嫡孫ボディ・アラクが嗣いだ如く記して、バルスボラトの篡位に全く触れてゐない。これは源流の著者がバルスボラトの子孫であるため、その近き祖先の汗位篡奪の悪業を隠蔽したためであることは和田先生が指摘せられてをり、源流にも伝へるボディ・アラク・ハガンが右翼三万戸を滅ぼさうとして果さなかつたといふ話がこの篡奪事件の余燼と覺しいことも同先生の説かれる通りである。⁽⁴⁷⁾ して見れば蒙古の史書は一樣に四代の可汗の存在を示してゐることが知られるが、一方明側の伝へでも、(1) 成化十七年五月己亥に明実録に初見し同二十三年にその死を伝へられた小王子で四夷考等が把禿猛可と呼ぶ者、(2) 翌弘治元年に大元大可汗と称した小王子伯顔猛可王、(3) その死後一時篡立したと四夷考等の伝へるその仲子阿著、(4) 阿著が未だ幾ならずして死した後に衆が立てたト赤の四代が

数へられる。この中阿著がバルスボラト親王、ト赤がボディ・アラク・ハガンなることは確かであるから、結局成化二十三年死の小王子はボルフ親王、次の伯顔猛可王がダヤン・ハガンに当ることは疑ないやうに見える。

そこでボルフ親王の死が成化二十三年中のことであつたと仮定して、それ以後の三可汗の年代を蒙古史料が如何に伝へてゐるかを検しよう。先づダヤン・ハガンについては、アルタン・トブチに次の如く記されてゐる。

ダユン・ハガン (Dayun qayan) は三十七年帝位に在つて、四十四歳の時に崩じた。⁽⁴⁸⁾

別にこの可汗が即位の時に僅か七歳であつたことが記されているから、四十四歳はその在位の第三十八年のこととなる。この在位年数はガンガイン・ウルスハルでも同じであつて、

三十八年経つて、四十四歳の時甲子の年 (弘治十七年) に崩じた。⁽⁴⁹⁾

とある。前章で論じた通り、同書の紀年の淵源であるチャハル所伝の王名表には干支がなく、在位年数のみ記されてゐたと思はれるのでこの三十八年を正しいものとして採用すれば、成化二十三年から数へて第三十八年は嘉靖三年甲申に当る。

次のバルスボラト親王については、アルタン・トブチは一切在位年数を示さない。これはその篡位の期間が極めて短かつたことを暗示するが、ガンガイン・ウルスハルにも

ダユン・ハガンの崩後、ボディ皇太子 (Bodi qong tayiji) が若このでバルス・ボロト (Barsu bolod) が一月大位を守つて……⁽⁵⁰⁾

とあつてこの推測を助ける。この一箇月といふ数字を採れば、次のボディ・アラク・ハガンの正位もやはり嘉靖三

年中のことであつた公算が強い。先に引いた通りアルタン・トブチにはこの可汗を二十四年在位と伝へるが、嘉靖三年から数へて第二十四年は正に嘉靖二十六年丁未に当る。但しガンガイ・ウルスハルは四十三年在位と言ふが、これは勿論誤りであつて、順帝以後滿都魯までに生じた十六年のずれを埋めるためにボディ・アラク・ハガンの治世を延長したものに過ぎない。同様に蒙古源流の在位四年も、ダヤン・ハガンの歿年を嘉靖二十二年とした結果出て来た数であつて、これまた信じられない。要するに、根拠とし得るのはアルタン・トブチのダヤン・ハガン三十七年(正しくは三十八年)、ボディ・アラク・ハガン二十四年といふ在位年数のみであつて、これは成化二十三年にボルフ親王が歿したことを前提として始めて理解される年紀である。

所がここに一つの難関がある。それは蒙古の年代記の伝へるボルフ親王の歿年である。アルタン・トブチにはこの可汗の事を説いて次の如くある。

その後バヤン・モンケ・ボルフ親王ハガン(Bayan mungke bolqu jonong qatun)が亥年に大位に四年在つた時、……ユンシエブの数人がバヤン・モンケ・ボルフ親王の馬の端綱を控へて捕へて害し、寅年に崩じた。⁽⁵¹⁾亥年は滿都魯の歿した成化十五年己亥であるから、この親王の弒せられた四年後の寅年とは成化十八年壬寅を指すこと疑ない。蒙古源流の所説は先に引いたが、その歿年とする庚寅は成化六年に当る。然し前章で説いた通りこの辺の紀年は十二年づつ誤つてゐるから、庚寅とは実は壬寅であつて、やはり成化十八年である。ガンガイ・ウルスハルもその四年在位の点では同じで、次の如く言ふ。

Tai jung qatun の Aq-a barcin jinong (漢語の王)は Oyirad に害されたが、その子 Qaryuér tayiji は

Oyrad の Toron 太師の子 Esen 太師の女を娶つてゐた。(……) Qartu'ar tayij がつ Tomor の富人の家に逃れた後、Esen の女から生れた子 Bayan möngke bolqu jingong は、同癸未の年に大位に即いて、四年の丙戌の年(成化二年) Yöngsiyebu 部が叛し彼等に害された⁽⁸³⁾。

これも前章の所論に基いて十六年繰り下げればやはり成化十八年の事となる。一方明に伝へられた、ボルフ親王と覺しき小王子の死は成化二十三年の事で、両者の間には実に五年の差が生ずる。これは一体どうした事であらうか。

この疑問を懷いて蒙古源流を検すると、同じ壬寅の年に二つの出来事が伝へられてゐるのが眼につく。一つはダヤン・ハガンの正后マンドフイ・セチェン・ハトン(Mandugui seen qatun)が長子トロ・ボラト(Törö bolad)、次子ウルス・ボラト(Ulus bolad)を生んだ事であり、他はジャライル(Jalayir)のフトク小師(Qutur sigüsi)の女スミル・ハトン(Simir qatun)がダレ・ボラト(Gere bolad)を生んだ事である⁽⁸³⁾。今後者を描き、専らマンドフイ・ハトンとその生む所の雙生児について考へて見る。

一体蒙古の年代記が一致して伝へる所に抛れば、ダヤン・ハガンは幼少の折に父ボルフ親王の膝下を離れ、バルガチン(Balgačin)部のバハイ(Bagai)といふ者に養育されてゐたが、後にタンラハル(Tanglarar)部のテムル・ハダク(Temür qadar)の手に引き取られ、やがて滿都魯可汗の寡婦マンドフイの許に致された。可敦はホルチン(Qorčin)部のウネバラト王(Ünebalad ong)の求婚を却けてダヤン・ハガンと婚し、立てて可汗と爲したのである。して見れば成化十八年壬寅中には、(1)ダヤン・ハガンの結婚、(2)その即位、(3)長子・次子の誕生が相繼いで起

つたわけであるが、これは如何にも混雜の感を免れない。それに滿都魯の寡婦が何故夫の死後三年の成化十八年まで再婚を待たねばならぬか判らない。ダヤン・ハガンは幼時以來ボルフ親王と別居してゐたのであるから、滿都魯の可敦を娶るのに父の死後まで待つ必要はなかつたはずである。果せる哉アルタン・トブチには

その後バト・モンケ・ダヤン・ハガンの七歳の時に、マンドハイ・サイン・ハトン (Mandugai sayin qatun) が自分と結婚させて、同年亥の年に帝位に即けた。⁽⁵⁴⁾

とある。亥年は滿都魯可汗が歿してボルフ親王が立つた成化十五年己亥であるから、この年にダヤン・ハガンが即位したといふのは正しくないが、これは結婚の年次を言つたものと解すべきであつて、即ち滿都魯の死後直ちにその可敦がこの元裔と婚して亡夫の勢力の温存を図つたことを言ふのであらう。して見ればダヤン・ハガンの結婚と即位との間には相当の時間があつたのである。思ふにこの王寅といふ年は最初ダヤン・ハガンの長子・次子の生年として伝へられたのを、後にこの可汗の年代を決定しようとした王名表の作者が、同年中に両子の母マンドフイ・ハトンとダヤン・ハガンとの結婚があつたものと想像し、一方ダヤン・ハガンを擁立したのがこの可敦であつた所から、可汗の即位もやはり同年中と考へ、既に新可汗が立つたのならば前可汗ボルフ親王の死後に違ひないと見て寅年を歿年と定めたのであらう。この仮説を確めるために、次に源流所載の干支全体について論ずる。

(五) 蒙古源流の干支の性質

筆者は嘗つて史学雜誌第七十一編第六号に「蒙古源流年表稿」を書き、源流に頻出する干支紀年を整理してその

著者の抱いた年代観を明かにした。今同表に就いて見ると、明代の蒙古史に關係ある干支は順帝の後至元四年戊寅の昭宗の誕生に始まる。この年から始めてト赤の歿した嘉靖二十六年丁未までの間に出る干支を、それに係けられた事件の性質に従つて分類すると、二つの例外を除き悉く次の二群に分れる。

(a) 可汗・親王の生年・即位年・卒年

(b) ダヤン・ハガンの祖先及び子孫の生年

例外の一つはダヤン・ハガンの長子トロ・ボラト (Toro bolad) の卒年癸未(嘉靖二年)、もう一つはマンドフイ・セチェン・ハトン (Mandugui seen gaton) の生年戊午(正統三年)であるが、前者はト赤可汗の父であるから(a)項に準じ、後者はダヤン・ハガンの正后であるから(b)項に含めて差しつかへない。(a)項の干支が本来王名表に載つてゐたらしいことは既に論じたが、(b)項の生年干支の出典はと言へば、それがダヤン・ハガンの子孫の家に伝へられた系譜であつたことは想像に難くない。蒙古の系譜には、元來各代の生年を干支を用ひて記すのが例であつたことは諸々の例を挙げることが出来るが、最も明白にはシラ・トグジの末尾に近く外ハルハの家譜から転載された部分があつて、ゲレサンジャ (Geresanja) 及びその子孫について生年干支のみ克明に記入されてゐる⁽⁵⁵⁾。これより見れば(b)項に含まれる人々の生年のみ源流に記されて卒年を伝へないことも容易に理解されるのである。

それでは次にこれ等家譜所載と思はれる干支が信じ得るものか否かを検しよう。ダヤン・ハガンの孫ボディ・アラク・ハガンは王名表にも系譜にもその名が出てゐたはずであるが、先に説いた通り王名表は本来各代の即位年・卒年のみを十二支を用ひて記したもので、今源流に見える如き十干をも配当した形式は、後に系譜から生年干支を

採り入れるに當つて整へられたものと思はれる。して見ればこの可汗の生年甲子（弘治十七年）は系譜に由来するものであるから、これを用ひて系譜全体の信憑性を測るのも無理ではあるまい。甲子に生れたこの可汗は、嘉靖二十二年に至つて四十歳、同二十六年には四十四歳であつた計算になるが、恰もこの期間に明の宣府分守口北道の任に在つた蘇志皐の訳語にはこの可汗の事を記して「今年四十餘矣」とあつて、⁽⁵⁶⁾ 甲子誕生説の誤りなきを証する。それではその父トロ・ボラトの生年と伝へられる壬寅（成化十八年）は如何と言へば、二十三歳でボディ・アラクを生んだ勘定であるからこれ又無理がない。さすれば甲申（天順八年）に生れたダヤン・ハガンが十九歳で長子トロ・ボラトを生んだのも疑ふべき理由はない。間接的ながらこれでダヤン・ハガンの生年甲申とその子孫の生年干支とが信すべきものであることが推知される。

ところがダヤン・ハガンの祖先に溯ると、生年干支は俄かに疑はしくなる。次に明初以来の各代の生年を列記しよう。

- (1) Qarurčar (Qaryučur) düğüreng temür qong tayiji 癸卯（至正二十三年）
- (2) Ajai tayiji 庚辰（建文二年）
- (3) Arbarji jinong 癸卯（永樂二十一年）
- (4) Qaryučur tayiji
- (5) Bolqu jinong 壬申（景泰三年）

先づボルフ親王について言へば、景泰三年生れとすれば天順八年に至つて僅か十三歳でダヤン・ハガンを生んだこ

となる。これは到底事実とは思はれない。その父の生年が記されないのは源流の著者の失記であらうが、祖父のアクバルジ親王について見ると、その生年癸卯は景泰三年を去ること二十九年前で、二代続けて十五歳前後で子を生んだ計算である。これは天順八年を基礎としても同じで、やはり各代平均十四五歳にしかならない。アジャイ太子とアクバルジ親王との年齢差はこれ等に比してやや常識的で、二十四歳で子を生んだことになるが、これも天順八年との間隔から見ればやはり各代平均十六七歳で子を生むことになる。十六七歳で子を生むことは不可能ではないが、四代に涉つてこれが続くことは先づ考へられぬ。して見ればダヤン・ハガン以前の生年干支はすべていい加減な捏造であつて、始祖のハルグチュクのそれも論ずるには及ぶまい。それにアジャイは実はダヤン・ハガンの祖先ではないのである。⁽⁵⁷⁾

いくら捏造でもこれ等の干支は全く空に依つて作り出されたものではなく、それぞれ基く所があるのである。それは王名表中の干支であつた。始祖のハルグチュクから言へば、王名表には長兄エンケ・ハガンの生年を己亥(至正十九年)、次兄エルベク・ハガンの生年を二年後の辛丑(至正二十一年)としてゐるのに基き、更に二年後にその生年を置いたに過ぎない。次のアジャイは、父がエルベク・ハガンに殺され、そのエルベク・ハガンが叛臣に弑された後生れたとある伝説に基き、エルベク・ハガンの歿年なる己卯(建文元年)の翌年に生年を持つて来たわけである。次のアクバルジ親王の癸卯は、兄脱脱不花可汗の生年が壬寅(永樂二十年)とされてゐるのに依つてその翌年に置いたわけであり、ボルフ親王の壬申は、祖父が脱脱不花可汗を裏切つて殺し、自ら可汗の位に登つたが瓦刺の也先の謀計に中つて死し、父はトクマクに走つて殺され、後に遺された母から生れたとの物語に基いて脱脱不花の

殂落の年景泰三年としたものである。して見ればダヤン・ハガンの祖先の生年干支は、悉く王名表中の生卒年から導き出されたものとなるが、一体その王名表の生年干支は信じ得るものであらうか。

ダヤン・ハガン及びボディ・アラク・ハガンの生年として源流の伝へる干支が正しいものと見られることは既に述べた。ボルフ親王の生年は既に信じ得ない。して見るとこの辺に一線を描くことが出来さうである。これ以前ではマルコルギス・ハガンの生年丙寅（正統十一年）が先づ問題になる。この可汗の即位が景泰六年らしいことは前述の通りであるが、さすれば僅か十歳で立つたことになり、也先の乱後初めての可汗としてはいささか奇妙である。次はタイスン・ハガンの壬寅（永樂二十年）であるが、和田先生の研究に従へば、脱脫卜花王の名は明太宗実録卷九四、永樂七年七月丁亥の条に初見して、その所部を率ゐて来歸したことが記されてゐる。⁽⁵⁸⁾最後にずつと溯つてビリクト・ハガン即ち昭宗の生年戊寅（後至元四年）であるが、元史本紀の同年の条には何らの記事がない。却つて高麗史卷三六、忠恵王世家後元年四月の条にその母奇氏が第二皇后に封ぜられたことが見えて、これは皇太子の誕生がこの年にあつたことを示すから、昭宗の生年は正しくは後至元六年庚辰であつたことが知られる。これを以て觀れば系譜のみならず王名表の方でも生年干支のダヤン・ハガン以前の分は捏造に由るものとしなければならぬ。

以上の所論を整理すれば次の如くなる。蒙古源流に含まれる干支紀年の根源は、干支を用ひて生年を記したダヤン・ハガンの子孫の系譜であり、これとは別に十二支のみで即位年・卒年を記した王名表があつたが、後に系譜から生年干支が王名表に取り入れられた際、それに合はせて即位年・卒年にも十干が配当され、系譜になかつたダヤ

ン・ハガン以前の可汗にもそれぞれ生年干支が作為された。今度はダヤン・ハガンの祖先の系譜が作られ、体裁を統一するため子孫と同じく生年干支が記入されたが、それ等は悉く王名表中の干支から導き出されたものであった。要するにダヤン・ハガンの生年甲申が、信用出来る干支の最古のものである。

こうした経緯から察して、元来知られてゐなかつたダヤン・ハガンの即位年、及びその父の歿年を推定しようと試みた王名表の作者が、トロ・ボラト、ウルス・ボラトの生年と系譜に記された壬寅を手掛りとして、ボルフ親王の死とダヤン・ハガンの嗣立を同年内の事と考へたのは無理からぬことであつたが、これを十二支のみを用ひて「寅年」と記したために、後に十干を配当する時誤つて十二年早い庚寅に当て、これからダヤン・ハガン七歳即位説が出て来たのである。

源流に伝へるダヤン・ハガン嘉靖二十二年癸卯殂落説の成立事情も同様にして説明出来る。ダヤン・ハガンの長子トロ・ボラトは嘉靖二年癸未に卒したが、これは父可汗の生前の事であつたと源流は伝へる。一方他書にはダヤン・ハガンの死後第三子バルスボラトが一時纂立したことが説かれ、源流の著者もこれを知つてゐたらしい。源流の記す所に従へば、バルスボラトの卒年は嘉靖十年辛卯であつた。さすればダヤン・ハガンの殂落は嘉靖二年から同十年までの間に起つたわけである。前章ではトメト、チャハル両系の紀年に拠つてこれを嘉靖三年と定めたが、適々この条件に合致してゐる。しかしオルドス系の王名表の作者はこれを知らず、唯伝へられたバルスボラトの卒年辛卯に基き、その治世が極めて短かつたことから考へてこの年にダヤン・ハガンとバルスボラトが相繼いで歿したものとして「卯年」と記入し、それが後に誤解されて十二年後の癸卯に当てられたのであらう。

かく蒙古源流の干支の起源が明かになると、前に述べた仮説はどうやら成り立つやうである。要するに成化十八年にボルフ親王が歿してダヤン・ハガンが立つたといふ蒙古史料の所伝は、後者の長子・次子の生年から派生したもので事実ではない。やはりこれは明実録に従つて成化二十三年の事としなければならない。

ダヤン・ハガンの年代は、かく天順八年出生、成化二十三年即位、嘉靖三年卒去と定まつたわけである。(完)

(東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所助教授)

(註) Altan tobči, dooradu debter, pp. 127—153.
 一二行、二頁六行から二六行一行にそれぞれ続かなくてはならない。

(33) Altan tobči, dooradu debter, pp. 127—153.
 (34) 実は原文には「巳年 (mofai jin)」とあり、建文三年

辛巳を指すやうであるが、それでは前後の在位年数と合はない。taulai (卯) の誤写と見て改めた。

(35) 和田清「東亜史研究(蒙古篇)」二四〇、八三七頁。

(36) 同書、二〇二頁。

(37) 同書、二〇一、二〇六—二〇七頁。

(38) ウルガ本 50r—61v. 殿本 pp. 127—159. シュミット本 pp. 138—176. オルドス A 本 pp. 135—168; B 本 pp. 119—149; C 本 pp. 135—166.

(39) 和田前掲書、四二七頁。

(40) Ganga-jin uruskhal, pp. 23—25, 19—21, 26—27. 同書には錯簡があり、一九頁一行から二五頁八行後半、二六頁一〇行から二二頁六行、二五頁八行前半から一九頁

(41) 和田前掲書、三五五頁。

(42) Altan tobči, dooradu debter, p. 179.

(43) ウルガ本 67v. 殿本 p. 178. シュミット本 p. 198. オルドス A 本 p. 185; B 本 p. 165; C 本 p. 182.

(44) Ganga-jin uruskhal, p. 31.

(45) 和田前掲書、五三七—五三八頁。

(46) ウルガ本 61v. 殿本 p. 159. シュミット本 p. 178. オルドス A 本 p. 168; B 本 p. 149; C 本 p. 166.

(47) 和田前掲書、五二四頁。

(48) Altan tobči, dooradu debter, p. 176.

(49) Ganga-jin uruskhal, p. 28.

(50) Ibid., p. 30.

(51) Altan tobči, dooradu debter, pp. 159, 154, 159.

本書には錯簡があり、一五四頁二行前半から一五六頁二〇行後半、一五九頁四行から一五四頁二行後半、一五六頁一〇行前半から一五九頁五行に続けて読まねばならない。

(52) *Ganga-iin urushkal*, pp. 27—28.

(53) ウルガ本 66r—v. 殿本 pp. 174—175. シュミット本 p. 196. オルドス A 本 p. 183; B 本 p. 162; C 本 p. 180. この記し方ではゲレサンジャ (*Geresan'ja*) も壬寅生れの如くであるが、正しくは癸酉 (正徳八年) であるから今取らない。

(54) *Altan tobči, dooradu debter*, p. 164.

(55) *Shara Tudzhi*, pp. 109—118.

(56) 和田前掲書、四六四、五三三。

(57) この事は本篇の続稿で論ずる。

(58) 和田前掲書、二六九頁。

次号 (第四十九巻) 予告

論説

南宋東南会子の発展

切韻における蒸職韻と之韻の音価

資料紹介

草野 靖
平山 久雄
佐々木正哉

批評と紹介

松本雅明著 春秋戦国における尚書の展開

友枝竜太郎

広禄・李学智著 清太祖朝「老満文原檔」与「満文

老檔」之比較研究

劉鳳翰著 袁世凱与戊戌政変

M・A・ベルシッツ著 極東共和国と中国

劉世儒著 魏晉南北朝量詞研究

S・M・スターン編 イスラム記録所の文書第一集

彙報

中国の博物館 (一)

伊藤 秀一
坂井 健一
渡辺 宏
菊池 英夫